

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第2章「1号機爆発」

「梅さん」。福島第1原発でそう

呼ばれて頼りにされていた男がい

る。梅松悟(60)。日立プラントチ

ャローから東京電力に出向してい

た電気工事のシテラシだ。3月12

朝、梅松は2号機タービン建屋南側

の大物搬入口にいた。

2号機の低圧系配電盤と電源車を

ケーブルでつなぎ電源を復旧させる

ため、東電や日立の約30人が全面

スクに防護服で集まっていた。梅

松は現場のまどめ役だ。搬入口にバ

ックでつけたトラックの荷台には8

の字に巻かれた長い電源ケーブルが

載っていた。

「あー、駄目、駄目」

ケーブル敷設



福島第1原発で電源復旧に使われた電源車と同型車。2013年2月(東京電力提供)

放射線の怖さに耐え

なくなる。

作業員たちは両手でケーブルを持

ち、梅松の指示通り5、6分間隔で

ゆくりと運んでいた。一人にか

かる重さは30キロ以上だ。

「建屋の1階は外の地面より低い

んですよ。だから津波の水が残って

いて水浸しなんです。放射線管理

の鉄則から言っても絶対に入っちゃ

いけない。短靴でびしゃびしゃ

入って行きましてね」

ある時、免震重要棟から現場に出

て行く東電社員に話し掛られた。

梅松の息子より若い彼の声は震えて

いた。

「梅さん、俺、怖いんだ…」

梅松は島根原発、敦賀原発など各

地の発電所工事に携わってきた。四

半世紀前には、福島第1原発の4

所でも傷つけてしまえば、通電でき